

平家物語 扇の的

(口語訳)

時は二月十八日の午後六時頃のことであるが、ちょうどその時北風が激しく吹いて、磯に打ち寄せる波も高かった。舟は、波に揺られてゆらゆらと揺れ動いているので、扇も竿にしっかりとまらずひらひらと動いている。沖では平家が、舟を一面に並べて見物している。陸では源氏が、馬のくつわを並べてこれを見ている。どちらも晴れがましい。与一は、目を閉じて、

「南無八幡大菩薩、わが国の神々の、日光の権現、宇都宮大明神、那須の湯泉大明神、どうか、あの扇のまん中を射させてください。これを失敗すれば、弓を折り自害して、人に二度と顔を合わせることできません。もう一度私を本国へ迎えようとお思いでしたら、この矢を外させないでください。」

と、心の中で祈り、目を見開くと、風も少し弱くなり、扇も射やすそうになった。

与一は、鎚矢を取って弓につがえ、十分に引きしぼって、ひゅうつと放った。小兵ということで、矢は十二束三伏だが、弓は強く、鎚矢は浦一带に響くほど長く鳴り続けて、誤りなく扇の要のきわから一寸ほど離れたところを、ひいふつと射切った。鎚矢は海へ入り、扇は空へ舞い上がった。しばらくは空に舞っていたが、春風に一もみ二もみまれて、海へさっと散ってしまった。夕日が輝いている中に、金の日輪を描いた真っ赤な扇が、白い波の上に漂い、浮いたり沈んだり揺れていた。沖では平家が、舟端をたたいて感心してほめたたえた。陸では源氏が、えびらをたたいてどよめいた。

あまりのおもしろさに感に堪えなかったのかと思われて、舟の中から五十ぐらいの男で、黒革おどしの鎧を着て、白柄の長刀を持った者が、扇を立ててあった所に立って舞いだした。伊勢三郎義盛は、与一の後ろに馬で近寄り、

「ご命令だ。あれを射なさい。」

と言ったので、今度は中差しという矢を取って弓につがえて、引きしぼってその人の首の骨を射て、舟底へ逆さまに射倒した。平家のほうは音もしない。源氏のほうはいびらをたたいてどよめいた。

「ああ射た。」

と言う人がおり、また、

「情け知らずだ。」

と言う者もいる。